特30-131
1200500813222

モイセイの話

山田藏太郎

国立国会図書館

C-39
特30- 1342
131
C 216
386

正哉兒訓叢書

第二編

モイセイの話

正哉會編輯局

特49
233

モイセイが王女に救はる

H. PISA.

エギペトに於る初生者の殺戮

正教兒訓叢書第貳編　モイセイの話

目次

一　イズライリ人……一頁
二　ナイル河の水泡……五頁
三　葦の籃舟……十頁
四　同胞兄弟……十四頁
五　零落……二十頁
六　焔の荆薊……二十五頁

目次

七　強情な王……二十九頁
八　九度の罰……三十二頁
九　逾越……三十六頁
十　紅の海……四十頁
十一　勝鬨……四十四頁
十二　今ゝ昔……四十八頁

降生一千九百〇一年
明治卅四年五月稿

正教兒訓叢
書第貳編

モイセイの話

一　イズライリ人

イオシフの時代に、エギペトに引越して來た父イアコフを始め、兄弟だちや其家族や、凡て其一族をイズライリ人（又はエウレイ人）と言ひました。そこで、イアコフはエキペトに移ッてから十七年生存ッて、百四十七歳で死、又イオシフは父が死亡ッてから五十四年存命で、百ゝ十歳で死ました。

イオシフが死亡ッてから五六十年も經と、イズライリ人は大

層繁殖ました。其間には先の王は崩御ッて、新しい王の代となりました。此新しい王は、以前イオシフがあれ程、此國の爲に骨折ッた其功蹟を有難いとも、何とも思はないで、反ッてイズライリ人が段々殖るのを見て、若や戰爭でも始まると、敵國に加擔して謀叛を起しはせぬか、此國から逃出しはすまいかと心配仕出して、何でもイズライリ人を殖さぬように——減してしまはうといふ考から、督役者を立てゝ、城を築るのに、和坭だの、作甎だの、其外田圃の色々な工役に夢闇やたらに追使ッて苦めました。イズライリ人は見る影もないほど酷く窘め付られ

て、誰も彼も弱りぬいたけれども、神樣のお仁惠で、難義の中ふも反ッて同胞が殖るばかりでありました。

仕方がなくなッて、王は一つ新しい窘逐法を考出しました。

それは、産婆に命令て、イズライリ人が生ところの子で、男であッたならば、分娩の時、取上ずから皆其場で壓殺してしまうといふことであります。なるほど、こう遣れば殖ようがない譯であります。ところが、エギペトの産婆だちは、神樣を畏れて此殘酷い命令には從いませんでした。王は意地が燒けて堪らん、早速産婆ども呼付て、何故命令通りにせぬかと叱ると、産婆

が言うには、元來イズライリの婦人ごもの強壯なこと、言ッたなら、こてもエギペトの婦人ごもの及ぶところではありません、其故、産婆が呼ばれて往く間には、もう分娩で自分で取上てをるから、いつも間に合んのであります、と言退ました。神樣は、産婆だちが神を敬う心の深いのを賞て、其家を繁盛に守られました。

どう遣ッて見ても甘く行ず、反ッて益々イズライリ人が殖るばかりなので、今度は一層殘酷い命令を王は公布ました。イズライリ人で、新に生れた男の子は、片端から引捕いて、ドシドシナイル河へ抛り込んで殺し、唯女の子ばかり殘して置くこいう事であります。

二　ナイル河の水泡

罪もない赤兒を川へ流すとは、餘り殘忍無情な處置ではありませんか。我正教の小さき友だちよ、若もあなたがたの家で、玉のような美しい赤兒が生れたとして、うれが唯母の温い乳より外何も知らずに、呑み飽れば他愛もなくスヤ〳〵と眠ッて、折々夢の中の笑をニコ〳〵と、口元のあたりへ湛へてをる其可愛らしさ。其が段々生長して、廻らぬ口をようやくまわして、

兄さん、姉さんと言いながら、一所に轉げ廻ッて遊ぶようになッたならば、どんなにあなた方は嬉しいでしよう。ところが、誰か其可愛い赤兒を、母の懷から浚ッて行ッて、川へ投込んだとあたならば、あなた方は何とするでしよう。哀れイズライリの赤兒は、ういう酷い目に遭うのであります。

丁度其頃でありました。イズライリ人の中に、アムラムという人があッて、其妻はイオハウエドと申しました。二人の間にはマリアムという娘の子と、取ッて三歳になるアアロンという男の子があッて、そこへ又一人の男の子が生れました。

玉のような美しい、可愛らしい其赤兒を見るにつけ、母イオハウエドは設令公の御規則であろうとも、之を人手に渡して殺すというようなことは、假にも忍耐の出來ることではない。辛い思をして三月がほどは、秘し隱しにかくして置きましたが、然し段々生長に隨ッて、うう〳〵何時までも隱し通しは出來ぬ。物心もない赤兒のことであるから、時としては聲を限りに泣出しもする。それが若も偵吏の耳に這入ッたならば、それこそ大變な事になる。可愛い赤兒は言うに及はず、隱匿した罪で兩親始めどんなお刑罰に遇ッて、一家の滅亡となるかも知れぬので

あります。想へは薄い氷の上を歩むようゐ心持がして、一寸した人の足音にも、若や偵吏ではあるまいかと、悚然として冷汗を流すことが、日に幾度となくある。哀れゐ母ではありませんか。アヽ誰が爲に此苦勞をするのでしよう。

さればとて、現在川へ投込まれると知ッて、うれを公の手に渡すのは、鬼のような酷い心でもなければ、とても親としては出來ぬことであります。けれども、此儘隱しておいても、鷹のような目をして、偵吏が探して居るのであるから、とても見付からんで濟む譯には行かぬ。若も見付ッては最う最後、一刻の

容赦あらばこそナイル河の水の泡となるのである。浮いては泣き、沈んでは悶搔き、譯も知ずに苦み苦んで、哀れや甘露のような其生命が――アヽ想ふさへ身を殺れるようである。然し、どう考て見ても他に助かる途がない。途方に暮れた母は、千切れるようゐ思で泣〳〵斷念めました。とても無い此兒の生命と斷念た。とは云へ、同じ無いながらもせめては片時つゝなりと、餘計に生延したいと思うのは、無理とは言へぬ親の未練でございましよう。さて、それにしても、何とか善い工風はあるまいかと、又いろ〳〵に思案をしたが、つい考付いたことがあると

見えて、此エウレイ人の母は一個の籠を持出して來ました。

三　葦の籃船

イオハウエドが今持出したのは、葦で編んだ籠であります。其籠の目を瀝青と樹脂で塗ッて塞いで、丁度箱船のようにして、その中へ赤兒を寢せました。そうして母は娘マリアムを呼んで、

「お前はこれを川に持ッて行ッて、葦の生てゐる水涯に置て、そうして何處かに隱れてゐて、どうなるか暫く樣子を見てゐておくれ……」

と、涙ながらに申しました。ア、どうしても此赤兒は川に捨られるのであります。それを聞いて、姉のマリアムも悲んだでございましょう。けれども、今はどうにも仕方がない。マリアムは涙ながら其を持ッて川に往ッて、母に言はれた通りに致してううして自分は少し遠くに離れて、樣子を見て居りました。中の赤兒は何も知ずに、唯スヤ〳〵と眠ッて居ります。

そこに偶々、王の姫君が侍女を連れて、水浴にまゐりました。優しい姿して靜〳〵と歩いて來ると、水際の葦の間に、何やら妙なものが浮いて居るので、侍女に取ッて來させて、籠の蓋を

開いて見ると、これはシタリ、可愛らしい赤兒が寢て居て、目を覺してオギャ〳〵と泣出しました。姫君は、ヲ、可愛兒だ、イズライリ人の子のよう、と言いながら抱いたり嫌したりして瀕りと憫憐がッて居る。

其樣子を見たマリアムは、飛立ほど喜びましたが、躍る胸を抑へて畏る〳〵姫君の前に出て、

「姫君樣、此兒をお養いなさるお思召で遊ばされますから、わたしが此兒の乳母になるものを、エウレイ人の婦の中から見付けて參りますが、いかゞでございましよう……」

と、申上ると、姫君は直ぐご承知になッたので、マリアムは飛ようにして家に往ッて、母を連て來ました。スルと、姫君はイオハウェドに仰しやるには、

「ごうかお前は、此兒を自家に連て行ッて、大事に養育ておく呉れ、里扶持は此方から遣はすから……」

さても斯ンな目出度事が何處にございましよう。イオハウェドは今迄の心配も苦勞も悉皆忘れて、赤兒を抱てマリアムと一所に喜びよろこんで歸ッて來ました。

思いがけなく我懷にかへッた赤兒を、まことの母は心を籠て

養育てました。そうして何年過てからのことか、最う大分生長くありましたから、姫君の許に連て出てお渡し申すと、姫君は自分の子にして、これにモイセイという名をお付なさいました。「モイセイ」とは援出という意味で、以前川から取上たことを名にしたのであります。然し不思議にも此名は、モイセイの一代の使命になるのであります。自分の同胞兄弟であるイズライリ人を、エギペト王の壓制から救出すという使命を、神様から命令る偉大人になるのであります。

四　同胞兄弟

今やモイセイは、王の姫君の子となッて、宮殿に養れて居るのであるから、何の不自由不足もなく生活し、其上エギペトでの學問は、何から何まで皆な薫陶れました。然し人は學問をして智識が付くと、兎角自慢氣が昂じて、敬虔な心がなくなるものが多いけれども、モイセイは決ッしてそういう人ではありませんでした。これは小さい時、神様に熱信な母が、心を籠て眞の信仰を植付ておきましたから、其心が次第〳〵に伸て、其通り敬虔な人になッたのであります。

月日の經は早いもので、いつか既モイセイは四十といふ年に

なりました、少時から宮殿に養はれて居たのであるから、自分の眞正の父母を知らないで終ッたかというに、決してそうではない。段々生長にあるに隨ッて、自分は王の孫でも姫君の子でもないと知りました。それのみならず自分の同胞兄弟であるエウレイ人が、今國王の壓制を受て、大層な艱難に遭て居るこいうことも聞いて、心の中で大に慷慨悲憤して居りました。是非一度實際の狀態を見届たいと心懸けて居りましたが、或時ついに思切ッて密と城を脱出しました。

なるほど噂に違はぬ悲慘な狀態である。牛か馬でもなければ

出來ぬほどの、苦しい勞働に使役れてをるのであるから、何のイズライリ人を見ても、皆な蒼青な顔して衰へ果て居る。それを見たモイセイの心は、早や沸立ほどであるところへ、偶々一人のエキペト人が、殘酷にも痩せ衰へた一人のイズライリ人を攫いて、毆ッて〳〵打のめして居るので、さア、もう溜らなくなッた、左右を見れば幸人も居らない、己れと言いさま飛び懸ッて、氣味よくも其エギペト人を打殺してしまいました。そうして其屍を沙の中に埋めました。

翌日又出て見ると、困ッたことには、今度は同じイズライリ

人同士で喧嘩をして居るのです。モイセイは其仲裁をいたうと思ッて、曲者の一人に向ッて、

「コレ〳〵お前だちは、言はゞ兄弟ぢやないか、それだのに何故お前はそう兄弟を撃のだ……」

と、言ふと、其男は元來性の善くない人間と見えて、

「要らンお世話だ、誰がお前を親分に頼んだか、コレお前は昨日エギペト人を殺したが、今日は又已を殺す積りで、そンな餘計な口を出すのか……」

と、折角モイセイが親切に言ッた語を仇に復しました。モイセイは其を聞いて、ギックり胸に衝りました。さては昨日の一件が、既人に知れたのかと思うと、浮かゞはして居られなくなッたのであります。彼是するうちに、モイセイが殺人をしたこと噂が、一時にパッと擴ッて、王宮へもれが聞えるようなことになりました。王は大層怒ッて、モイセイを死刑に處なければならんと言ッて、捜索し始めたので、いよ〳〵エギペトには居られなくなッて、逸早く出奔した。モイセイは今日が今日まで、何不自由なく宮殿に生活して居ッた身であります。若も自分の同胞兄弟が、どんな難義をして居ようと、哀れども氣の毒

とも思はず、平氣で居るならば、相變らず王樣の子として安樂が出來るのでありました。然れども、モイセイは其ンな薄情な人ではなく、自分の一身は如何あろうとも、哀れな此同胞兄弟を救はなければならんと、覺悟したのであるから、假令王が殺すと言はんでも、王の子となって居る氣はなかッたのです。今やモイセイは全く自分一身の榮譽榮華を捨てしまいました。そうしてこれからモイセイが絶大活動をするのであります。

五　零落

昨日まで雲の上に寢轉んで居たようなのが、今日は家無の落人となり下ッて、寄るべなき身となッた哀れのモイセイは、さまよひ〳〵アラビヤへ行ッて、紅海はエラニト灣の近傍、マデイアムという處へ參りました。うこえらに井戸が一つあッて、それに立寄ッてモイセイは疲れた足を息めて居ると、向うから羊の群を追いながら來る七人ほどの女子がありました。

此マデイアムの土地に、イオフォルという司祭があッて、今うこへ來たのは、此司祭の女どもであります。其羊群に水を飲せる爲、井戸から吸んで水鉢へ溜てゐると、そこに又他の牧者連中がごや〳〵と遣ッて來て、女ど侮ッて自分共が先に汲うとし

たので、弱い者を扶ける氣のモイセイは、坐視傍觀ることが出來ないで、直ぐ立ッて他の連中を制抑て、女子どもの羊に飲せて先へ歸してやりました。

女子どもが家へ歸ると、父のイオフォルが、

「今日は大層平日よりは早く歸ッたようだが、どうした譯か……」

と、問いました。女子どもが、答へて言うには、

「一人のエギペト人が居まして、他の牧者どもを抑制て、そうして私共に助手ッて、羊に水を飲ませて呉れたものですから、こう早く歸れたのであります……」

それを聞いて父は、

「其人は今何處に居るか、一所に連て來て御飯でも御馳走すればよいのに……」

と、言はれたので、女子だちはモイセイを呼んで來ました。

此イオフォルといふ人は、やはり其先祖がアウラアムでありますから、モイセイと同じ血筋柄であッて、眞の神樣を信仰して居ッたのであります。誰を今頼りとする人もないモイセイに取ッては、甚だ懷かしく思はれて、ついイオフォルの家に同居

することになりました。そうしてイオフォルは其娘の中のセプホラというのを嫁にしました。間もなく男の子を持ちました。

モイセイが此家に居たのは、四十年の間であッて、其間やはり此家の羊群の世話をして生活してをりました。

斯る間にエギペトでは、王の代替りとなりました。けれども、イズライリ人は不相變牛馬のように追使はれて苦んでをります。餘りの苦さに、オ、辛い〳〵と、誰も皆嘆息ので、其哀れな聲が神に聞えました。シテ、神樣はこれから此イズライリ人をお救ひなさるのであります。

六　焔の荊莉

或時モイセイは、羊群を遊ばせながらホリフといふ山に行きました。所が、不思議なことには火がドン〳〵燃てるのから、其火の中の荊莉が少しも燃切んのです。ハテなと思ッて近寄ろうとすると、其處に聲がして、

「モイセイよモイセイよ近寄ッてはならぬ、履を脱げ、其處は聖地であるぞ……」

之は神樣の聲であるとこ氣が付ましたから、モイセイは畏まッて履を脱ぐと、又聲がして、

「我は、我（イズライリの）民が、エギペトで艱難してをるのを視、又エギペトの督役者に殘酷く窘められて號哭てをるのも聞いたに依ッて、我民をエギペトから救脫して、乳や蜜の流れるような、土地の住いハナアンへ歸すようにする、さア、來い、我は爾をエギペト王の許に遣る、爾は我民をエギペトから導出すのである……」

モイセイは、とてもそういう大事業は、自分には出來ないこと言ッて辭退すると、神樣は、我が一所になッて爲る事に、出來ないといふことは無いと仰せられ、彼此爰に問答があッた末、

爾の手に持ッてをるものは何かと問はれて、モイセイが杖であると答へると、其を地に擲付よとのことで、投ると其が直ぐ蛇に化ました。モイセイは驚いて側へ避ようとすると、神樣が其尾を攫めと言はれるので、其通りすると、又元の杖に復りました。それから又、手を懷に入て出して見ると、瘡だらけの汚い手になり、それを又入て出すと、今度は元の奇麗な手になりました。こう不思議な事を一度も二度も遣ッて見せて、それでも未だイズライリの人だちが、爾を眞實にしない時には、ナイル河の水を汲で地に撒け、そうすれば水が屹度血になると言ッて、

モイセイを勵ましました。けれども、モイセイが未だ不安心に思ふて居るのは、自分が極く吶辯なことである。それを申すと、『視も聽も話すも固と誰の爲る事と思ふ、皆我の爲ることではないか』と、神樣がお諭しなさいました。此上は既萬事を神樣に委せて、諾と決心すべきであるのに、モイセイは、誰か他の偉大人に……と言出したので、神樣は、

「辯舌の能い兄のアアロンが爾にあるのを、我は知らぬと思ふか、爾は我の言ふたことをアアロンに話せば宜い、アアロンは爾に代ッて能く民衆に話す、さうして爾は其杖で奇蹟を行へ……」

と、言ッてモイセイをお叱りなさいました。

七　强情の王

モイセイはいよ〳〵決心してマディアムを出立した。途中で兄のアアロンに遭ッて、之と一所にエギペトに行き、シテ、イズライリの長老だちを集めて、アアロンはモイセイに代ッて、神樣の仰せを一々話し、モイセイは亦、其證據に奇蹟を行ッて見せました。長老たちは二人を眞實にして、偖はいよ〳〵神樣のお救護が來たと言て感謝致しました。

今度は、エキペト王の許へ出懸て、說服あければならぬ順で

ある。うこで二人は王に謁ッて、

「我イズライリの神『イエゴウ』の仰せである、我々イズライリの人民に、三日路ほどの曠野に往ッて其處で、神様に祭を献げることをお許容下さい……」

と、申すと、王様は、

「イエゴワなんぞは我の知ッたことではない、又イズライリ人には往くのを許さぬ……」

と、答へました。うれ斗りではない、これからといふものは、イズライリ人に瓦を作らせるのに、今迄瓦を造るに必要な禾稈

を給ッてゐたのを、ピッタリ止て、各自自分で集めて、そうして瓦は是迄通りの數を仕上ろ、といふ無理な命令を爲て、其上王は何といふかと言へば、一体彼奴等は惰性である、だから、宜加減の事を言ッて休業たがる……と、こんな次第であるからイズライリ人は、益々困難となりました。

其次又モイセイはアアロンと共に王に謁ッて、自分だちは、畏多くも神様から命令ッて來たものであるといふ證據に、例の杖で蛇の奇蹟を行ッて見せました。すると、王はエギペト國の博士を召して、魔法を使ッて矢張杖を蛇にさせました。が、モ

イセイの杖は、魔法の杖を呑で仕舞ました。大体なら既之で往生する筈なのに、強情な王は、未だイズライリ人に自由を與へませんでした。そこで、神様は其次〳〵とエギペトに災難をお降しになりました。

八　九度の罰

（一）翌日モイセイとアアロンは、ナイル河の岸で復王に謁ましたが、アアロンはモイセイに命令ッて、王の目前で其杖で河の水を敲くと、其河ばかりか何處の河も池も皆水が血に變ッて、魚は死ぬ、水は臭くなるで、エギペト人は飲料水に困ッて

別に井戸を堀る騒ぎとありました。

（二）それから又七日過て、アアロンが杖を水の上に擧ると、蛙がエギペト中に出て、家屋や、寢室や、寢床や、竈や、皿鉢にまで這上ッて始末に終ないことになりました。モイセイが祈禱をして一先此災難を止ましたが、それでも未だ王は強情張てをるので今度は、

（三）杖で地の塵を擊つと、塵が忽ち蚤となッてエギペト中に殖ました。

（四）其次には蚋が大層多く飛で來て、ブン〳〵人を螫す。

（五）疫病が流行ッて來て、エギペト人の家畜がコロ〳〵斃れる。

（六）王の前で、モイセイが灰を一握取てパッと撒くと、それが塵になッて國中に瀰蔓ッて、人や家畜に腫物が出來て、大層それに惱まされました。

（七）それから二日過て、モイセイが杖を天に擧ると、雷が鳴出す、雹が降る、其雹で草や木や、戸外に居た人は皆擊れる。

（八）王はこれでも未だ强情張ッてをる。すると、東から大風が吹て來て、一日吹荒れてをるうちに、蝗が飛されて來て、

地が見えないほど澤山になッて、前日の雹で殘ッた靑物を皆な食ッて仕舞ました。

（九）モイセイが手を天に擧ると、眞黑な闇になッて、三日の間エギペト人は、見ることも起つことも出來ないでをりました。

こう度々災難が折重ッて來ても、未だ王は正直にならないで幾度も〳〵モイセイに、イズライリ人を自由にして遣ると約束しては、災難が弛むと又約束を破る。九度目の災難の時に、王はモイセイを威嚇つけて、此上二度と我前に來ると、決して活

しては置んと言いました。モイセイは怫然として、宜しい、二度とお目にはかゝりますまい……然し貴殿がたの方から首を下て、我々に出て往って下さいと拜まんようにおさい……と言捨て退りました。

九　逾越

神様は今十度目の罰をエギペトに降そうとなさるのであります。其罰が降ると共にイズライリ人は、エギペトから出ることが出來るのであります。

時は春の初であって、新月が始てソロ〳〵出初て、春の夜と

晝とが同じ時間にあるのも既近い頃でありました。

神はモイセイとアアロンに仰せらるゝには、

「斯月を歳の正月と致せ、ろうしてイズライリの全會衆にろう言って、各自の家に羊群の中から羔一匹撰分させて置け、其羔は必ず疵のない當歳の牡でなければならぬ、ろうして十四日の夕方になったならば、家毎で其羔を屠て、牛膝草の箒に其血を濡して、二の鴨居と門口の右左の柱に塗れ、それから其肉は生や水で煮て食てはあらぬ、火で炙って無酵麵包と苦來を合せて食るのである。食殘を翌日まで置ずに、殘ったなら

ば火で燬て仕舞へ、

又うれを食る時には、帶を緊乎締めて、履を穿て、杖を取ッて、全然旅支度をして、そうして急いで食て仕舞へ、此日は是れイエゴワの『パスハ』（逾越即ち通り越すこいふこと）である、此夜我はエギペトの土地を巡ッて、エギペト人の長子であるものは人でも家畜でも皆撃殺す、けれども、爾曹の家に血が塗ッてあるのを見るときは、其處は通越して何とも爲ぬ偖此日を能く紀念て、イエゴワの節期として、代々此日の晩から七日間無酵麵包を食ることに致せ……」

兩人はイズライリの長老たち一同を集めて、神樣の仰せを言聞し、長老だちからは下〳〵一同に洩なく傳へましたから、何れも皆其準備をして待搆へて居ると、十四日の夜半頃、天使がエギペト中を巡廻ッて、其長子であるものは、王の子であれ、獄に居る囚人の子であれ、家畜の首出であれ、殘らず殺しましたうれが爲に、國の中で何家でも死人のない家はなく、ワッワと泣き叫ぶ聲が全國に起ッて、哀れと言はんか、凄まじと言はんか、流石の王も全く我を折ッて、俄にモイセイとアアロンを召寄せて、イズライリ人を引率て此國を立退いて吳れと言い、人

民も亦どうか一刻も早く〳〵と急立てるので、率、此時機だと言ッてからに、いよ〳〵イズライリ人はエギペトから立退くことゝなりました。なか〳〵急忙しいとです。

十　紅の海

偖、イズライリ人が一旦エギペトに移住ッてからは、二百十五年過ました。此永い間、實に言い盡せない苦難をいたしたのであります。『パスハ』の翌日即ち正月の十五日に、ラメセスといふ邑に、イズライリ人一同が勢揃をいたしました。此時の人數は、徒歩のものばかりで六十萬人、其外何れ乘物で出立した

婦人小兒を合せると、大層な數になりましよう。雲霞の如しとは、斯んな場合を申すのでありましよう。

目に餘る此大勢が、指して行く處は何處かと言へば、イズライリ人がエギペトに居た年の恰度倍に當る四百三十年前に、其先祖に名高いアウラアムが、ハルデヤから移轉ッたハナアンであります。畢竟彼等は今先祖の故郷に歸るのであります。

碌々旅の準備もせず大急ぎに急いで、イズライリ人は出立しましたが、捷路を取ッて東の方へ廻れば早いけれども、それには途中の通筋で邪魔をする國があッて、戰爭をしなければならー

ぬことにもなる。ソコで神様は南の方へ導くのであります。晝は雲の柱が下ッて、行先を案内したり又日避になッたりし、夜は其が火の柱になッて矢張案内に立つ。そうして今は紅海という海を目懸て段々と進みました。海――とは些と氣の知れぬ進、行方のようでありますが、然し其處に一大事件があるのであります。

＊　＊　＊

話頭東西、エギペトに於ては、死だ長子共の葬式に忙がしい隣から隣へ其始末であるから、暫くの間は全く其悲や騒に氣を

取れて居ましたが、喉下通れば熱さを忘るとやらで、少し落着て來ると、イズライリ人を立退かしたのを惜くなッて來ました今迄牛か馬のように追使ッて居たのが、それが無なッたのであるから、一家一國の經濟上に大層な違算であります。懲性もない王は、イズライリの軍勢が紅海指して往ッたと聞て、之は的確道を迷ッての事と呑込んで、俄に撰抜の戰車六百輛と、エギペトの騎馬を引率て、自分も車で、急ぎ〳〵と計りイズライリ勢の後を追馳けました。

偖、大變。

エギペト勢が追付そうにあッた頃、イズライリ勢は未だ紅海の濱に居るのであります。前は廣い深い海で、後からは敵が砂烟蹶立てゝ驀に追迫ッて來る、進退維谷とは即ち之である。

十一　勝関

此狀態に膽を潰して、イズライリ勢は誰彼となく皆モイセイを怨んで、

「エギペトの土地に、我々を葬る墓が無いので、こんな曠野へ引張り出して、死なそうといふのですか、こんな處で死ぬ位ならば、寧エギペト人に使はれて居た方が益だッた……」

と、言出したっさて〳〵意氣地のないことではありませんか獨りモイセイばかりであります、此危急な場合に迫ッても、神樣を賴んで泰然として少しも心を擾さぬのは……。

「懼るゝな、神樣が今如何して爾曹を救ひ給ふかを起ッて見て居れ、今爾曹が見て居るエギペト人は、此先既見られなくなるのだぞ、神樣は今爾曹に代ッて戰ッて下さる、騷ぐな、靜かにして居れ……」

一同はモイセイの元氣な語に力付て沈靜てをると、今迄軍勢の前面に垂下ッて居た雲柱が、其後方に廻ッて兩軍の間に狹

まりました。そうしてエギペト勢には眞暗になり、イズライリ勢には其が光明になッて居りましたから、敵は容易近寄れない

モイセイは神樣の指圖に從ッて、杖を持ッた手を海の上に伸すと、強い東風が吹出して來て、終夜中吹續けて居るうちに、海の水がグン〳〵減ッて、其上遙か遠い向岸まで水が兩方に壁のように截斷て、其間が陸のように乾上ッて來ました。其處をイズライリ勢が驅込で、威勢よく向岸へ渡ッた頃には既明方でありました、偖エギペト勢は妙な處をイズライリ勢が通ッて逃ると思いながら、自分等も其跡を狙ふて、勢込んで追驅まして

途中まで往と、どうしたことやら、車の輪が脱れて仕舞て、始末に終ない。

「これは何でも、神樣がイズライリ勢の味方になッて戰うのであろう、とても勝はん早く逃ろ〳〵……」

すと、言出すものがあると、總勢俄に怖氣立ッて、我先と逃出しかけると、神樣は又モイセイに其手を海に伸させました。

すると、今迄截斷て居た海の水が、ドッと又舊に復ッて、有ると有ゆるエギペト勢は、美事皆波に呑れて、一人だに生存ッたものはありませんでした。そうしてイズライリ勢は、向岸で勝

関揚げて神様を讃頌ました。

十二　今と昔

罪悪に陥た此世の人間は、これは悪魔の國の奴隷に爲ッて居るので、恰度イズライリ人がエギペト國の奴隷に爲れて居たと同じであります。

悪い事には這人易く出難いのは、これ又イズライリ人がエギペトへ移轉る時には雑作もなく、うして其處から立退くには大層骨の折れたと同じとである。

救世主イイススハリストスを信じて、其救贖の聖功を頼まなければ、人は罪悪の國を立退くことの出來ないのは、イズライリ人がモイセイが居なければ、エギペトを出ることが出來なかッたと同じとである。

イズライリ人は羔の血を門口に塗て、エギペトへ降ッた神様の罰を脱れたように、十字架に磔られて血を流された神の子救世主イイススハリストスを信ずる者は救はれます。

人は洗禮を受て信者にならうと思ッても、用心しないと、悪魔が直ぐ後から追驅て來て舊へ復そうとし、自分も亦信者にかつて色々辛い目に遇うよりは、好氣儘にして樂した方が宜いか

ごゝ、弱い心を起さぬこも限れないのは、是亦エギペト王が後から追驅て來、そうしてイズライリ人が其に驚いてモイセイを怨んだようなものであるッて、劍呑おことである。

洗禮機密は罪を滅すものであるのは、恰度エギペトの軍勢が紅海の水で、一人も殘らず亡びたと同じである。そうして此機密で人が神の國＝教會へ甦生るのは、是亦イズライリ人が水の間を潛ッて、向岸へ上陸ったと同じことである。

イズライリ人は、紅海で神樣に救はれて、それから如何致したかと言へば、滿足にハナアンへ歸る事が出來ませんでした。

少し困難おことに遭遇と、直ぐ神樣を怨みモイセイを憎み、色々な我儘勝手を言出し、罪は犯す、惡い事は爲る、甚いことには、自分等の恩人であるモイセイ、アアロンを殺ろうとまでしました。此我儘お民を引率たモイセイの心配苦勞は一通ではありますまい。ううして一旦ハナアンへ這入掛けたのを、神樣の仰せを守らぬ爲に、四十年の間アラビヤの野に逆戻りして彷徨ふことになり、モイセイもアアロンも其間に死、その後イイス、ナウィンが後嗣となッた時、始てハナアンの土地に這入ることが出來ました。我儘ばかり言ッて、神樣のお約束おさいま

した神の國へも往けず、教會の忠實な信者にもなれず、彷徨漢となッてはなりませぬ。我小さき正教の友だちよ、聞給へ。

「召るゝ者は多く、撰ばるゝ者は少し」（マトフェイ廿二の十四）

之は救世主イイススハリストスの聖言であります。信者になるものは多いが、神樣の國に救上げられるほどの、善い信者は極く少いと言ふ意味であります。モイセイに引率れられた此イズライリ人の狀態を見て、我狀態の矯正すが肝要であります。

正教兒訓叢書第貳編　モイセイの話　終

明治三十四年六月十七日印刷
明治三十四年六月廿七日發行

定價金七錢

著作者　山田藏太郎　東京市牛込區原町二丁目十三番地
發行者　水島行楊　東京府北豊島郡瀧野川村大字西ヶ原八十六番地
印刷者　神田靜次郎　東京市神田區淡路町一丁目一番地
印刷所　日本印刷株式會社　東京市神田區仲猿樂町四番地

發行所　正教會編輯局　東京市神田區駿河臺東紅梅町六番地

◉傳道用小冊子

山田藏太郎著

天國と悔改

口繪　前驅イオアン授洗の圖

〔上〕天國は近けり。〔中〕悔改めよ。〔下〕永生に入るの門の三段に分ち、徹頭徹尾『悔改』を宣言せるものにして、傳道上の急先鋒たり前驅たる書なり。

●正教新報評　本書は傳教師ワシリイ山田藏太郎氏の新著にして……氏か得意の言文一致体を以て、平易に記述せられたるものなれば、一般信者の好讀本たると共に布教用に供して最も適當なる小冊子なり。

●警世評　本書は聖典の天國は近けり、悔改めよ、永生に入るの門の三章を解釋して俗世の罪に汚れたる人間を教戒せしもの時節柄誠に世道人心に稗ひある書と云ふべし

全壹册　定價　金六錢
郵稅　金貳錢

●小兒向き讀もの

山田藏太郎編

正教兒訓叢

書第壹編

イオシフの話

全壹册　定價金八錢　郵稅金貳錢

イオシフの賣らるゝ圖

口繪

イオシフ其兄弟に名乘る圖

目次、(一)兄弟十二人　(二)阱に投げらる　(三)身を賣らる　(四)エギペトへ　(五)夢の判斷　(六)王樣の夢　(七)立身　(八)饑饉　(九)お土産　(十)銀の盃　(十一)邂逅　(十二)親子對面

今や日曜學校各地教會に起りて、教會兒童の教育漸く其途に就かんとす。此時に當りて此書出づ、寔に時代の要求に適へるなり。文章は平易にして且興味あり、家庭用、日曜學校用共に裨益少からず。

發兌

東京神田駿河臺東紅梅町六番地

正教會編輯局

C-39